

## エドヴァルド・ムンクと「フレスクム画家」

—19世紀ノルウェー美術史の文脈から

川崎辰洋 (関西学院大学)

---

エドヴァルド・ムンク (1863-1944) は、一般には誇張された特異な人物を描く表現主義の画家として知られている。確かに、彼の有名な作品群におけるそのような人物表現は、それをみる者に強い印象を与える。そして、おそらくはそのために、一般の美術愛好者のみならず研究者たちも、作品に描かれた独特な人物像に注目し、その象徴内容や造形表現の特徴の解明に解釈の力点を置いてきた。しかし、言うまでもなく、ムンクは人物のみを描いていたわけではない。彼は画業の初期から晩年に至るまで、数多くの風景画を描いてもいる。

ムンク作品においては、自然の風景もまた、彼の作風を決定する重要な要素の一つである。特徴的な表現で描かれた人物を主題とした作品であっても、その背景には自然が描かれている。うねる曲線で描かれたフィヨルドや、水面にのびる月の光などもまた、ムンク作品の魅力の一つである。では、そのようなムンクの抒情的な風景表現は、どこに端を発するのだろうか。

ムンクは 1892 年にベルリンで開かれた個展を機に、その名声を高めた。彼の独自の様式が確立されたのもこの時期である。先行研究では、1890 年代に描かれた代表作のいくつかにみられる技法が、1880 年代の作品においてすでに用いられていたことが指摘されている。しかし、そこでの言及は主として人物表現を対象にしたものであった。そこで発表者は、とくに 1880 年代のムンク作品の風景について語る上で欠くことのできない存在としての、いわゆる「フレスクム画家 (Fleskum-malerne)」との結びつきに注目する。フレスクム画家とは、1886 年の夏にオスロ近郊のフレスクム農場に集った 6 人の画家をさす言葉である。ノルウェー美術史における彼らの重要性はすでに指摘されている。それによると、彼らは、ヨハン・クリスティアン・ダールからの流れを継ぎ、新たなノルウェー・ロマン主義を発展させた。また彼らは、感情移入を手段とする「情趣画 (Stemningsmaleriet)」の様式を確立したとされてもいる。本発表では、そのような情趣画の一例として、アイリフ・ペーテッセン (1852-1928) の《夏の夜、サンデ》(1884-94) を採りあげて、それがムンクの《タベ》(1888) や《浜辺のインガー》(1889) に影響を与えた可能性について検討する。

ヴォルやエッグムをはじめ、代表的なムンクの研究者たちも、ムンクの作品は、画家が抱いた感情を描いたものであると述べてきた。しかし、具体的にどのような感情が、いつごろから、どこで、どのようなかたちでムンク絵画の様式を決定するようになったのかについては、これまで十分に議論が尽くされていないわけではない。本発表は、その意味で、ムンク絵画にみられる独自の表現の出自の一端を明らかにしようと試みるものである。